〔語意考〕六月をみな月といふは、加美那利月の上下を略けり、

〔倭訓栞前編三十〕みなつき　六月をいふ、水月の義なるべし、此月は田ごとに、水をたゝへたるをもて名とせり、さなへ月よりうつれる詞也、一に神鳴月の上下略也といへり、神は雷也、

〔古今要覽稿時令〕みなつき六月　みなつきは六月の和名にして、ふるくより物にみえたり、いはゆる戊午年六月と、日本書紀神武紀にしるせるぞはじめなる、夫より以下は、萬葉集に不盡嶺爾零置雪者、六月十五日消者、其夜布里家利とよみ、古今和歌集夏歌詞書に、みなつきつごもりの日ともいひ、みなつきの河邊のはらへに夜更てと秘藏抄いひ、和名類聚鈔には、此月の名季夏とのみしるして、みな月の和名を出さず、八雲御抄にも、六月みなつきとしるさせ給ひたるを、ひとり此月の名義を解るは、いはゆる農の事もみなしつきたる故に、みなし月といふをあやまれり、一説に、此月まことにあつくして、ことに水泉かれつきたる故に、水なし月といふをあやまれりと、奥義抄いへるぞはじめなる、しかれば清輔朝臣の比ほひ、既に二説なるを、後世おほく前説をとらず、後説にのみよれり、水無月といふは、水かれて盡るの義也と東雅いひ、六月和名水無月といふ、まことにあつくして、ことに水泉かれつきたるゆへに、みづなし月といふと日本歳時記いひ、水無月、六月之和名也、此月炎暑甚、水泉涸盡、故曰水無月と歳時語苑いひ、水無月水氣干發スルヲ云フと跡部光海翁説いひ、水なし月といふを略して、水無月といふと惠美須草いふたぐひ、奥義抄の後説によりしなり、又此月の名を、かみなし月と解く説あり、類聚名物考に、六月、みな月、或人の雷月なるべしといへる理にこそといひ、加茂眞淵も、六月を美奈月といふ、加美那利月の上下を略けり、十月は除月にて雷のならねば、かみ無月といひ、六月は專ら雷の鳴故にむかひて、此名ありと意語いへるは、藏玉集、此月を鳴雷月といへるにかなへば、亦此説もすてがたしといへども、農事によりて、とく方然るべし、扨異名のごときは、六月、すゝくれ月と秘藏抄いひ、すゝくれ月、松風月と莫傳抄いひ、風待月、鳴雷月、常